

副作用説明、安心して飲めるよう改善を イレッサ訴訟原告

「お父さんは実験台だったのか。あと半年かけてでも慎重に認可していれば...」。肺がん治療薬「イレッサ」の副作用で死亡したとして、京都府の男性患者の遺族が15日、国と販売会社の責任を追及する訴訟に踏み切った。副作用のリスクの警告は十分だったのか。新薬審査に問題はなかったのか。怒りと不信の中で「薬を必要とする人がいる。安心して飲めるように改善してほしい」と願いを込める。

副作用の説明なく

男性は定年退職後、健康診断で「肺がんの疑い」と診断された。2002年4月に入院し、抗がん剤治療を続けた。治療は計画通りに進み、7月末に退院。墓参りにも出かけ、徐々に回復した。

男性がイレッサの服用を始めたのは、退院から1カ月後の9月2日。通院先の医師から「保険が利く、いい薬ができた」と勧められた。「イレッサ」いう薬の名も知らされず、副作用の説明もなかった。自宅で飲める手軽さもあり、1日1錠を飲んだ。

「苦しい」。間もなく男性は息苦しさを訴え出し、食事も取れなくなった。近くの病院に駆け込むと「間質性肺炎」と診断され、そのまま入院した。「がん治療はうまくいっていたのに。なぜ」。疑問が募った。人工呼吸器を付けたため会話もできず、苦しむと、ベッドの上でえび反りのような状態になって体を持ち上げた。苦痛が収まらないまま死亡した。イレッサ服用から1カ月後のことだった。

あんな苦しい死に方を

遺族が死亡とイレッサの関連に気づいたのは翌年1月。男性が亡くなって3カ月がたった。「イレッサ副作用死」の報道も出始め、200人近くの死亡患者に男性も含まれていた。「びっくりした。あれだけ頑張って治療してきたのは何だったのか」。怒りがこみ上げた。

男性の妻は「がんは縮小していた。副作用を知っていたら、イレッサを服用させなかった。お父さんはもう少し生きられたのではないか。あんな苦しい死に方をすることはなかったのではないか」と唇をかむ。

2度と起きないように

一方、癌(がん)治療薬早期認可を求める会(大阪市)の三浦捷一代表は「有効性と危険性の情報が、偏りなく正確に伝達されたのかが問題だ。副作用の報告が遅れた面があったのなら、企業は提訴を警告としてとらえるべきだ」と指摘する。しかし、「イレッサで助かった人は、副作用で死んだ人より多いことも考慮してほしい。薬が早期承認されなければ助からなかった人もいた」と訴える。

男性の妻や息子、弁護士は提訴後に記者会見した。遺族らでつくるイレッサ薬害被害者の会の近澤昭雄代表も同席し、「イレッサ自体をなくせと言っているのではない。当初の処方の方がずさんだったことを問題にしている」と強調した。二女 = 当時(31) = を亡くした近澤代表も東京地裁に提訴を予定しており、「私たちの戦いは、きょうスタートする。2度とこのような薬害が起きないことを願ってやまない」と力を込めた。